

第3節 真如苑における霊位向上 (川端 亮)

はじめに

特定の宗教教団の教えを理解することは難しい。特にその教団の信者でないものが、その教えを理解するという事は、かなり難しい。その理由を信者が信仰を深めていく契機という点からみよう。信仰を深める契機には、以下の4点が考えられる。第1に、教祖やそれに準じる教団の職能者たちが信者に与える不思議な体験、霊的な経験によって、信仰が格段に深まることがある。第2に教団の定める修行を行うことによって、信者が体感していくものがある。3番目に信者同士が集会を持ち、そこで体験談を発表したり聞いたりすることによって、相互に交流しあうことによって、理解が深まることもある。最後に信者個人個人が、教団が発行する教典や書かれたものを読み、信仰を深めるということが考えられる。以上の4つの契機にしたがって、信仰がいかに深まるかを理解することができれば、教えも理解できるであろう。ところが、これらは、各教団の信者となって、教えに真剣に没頭すれば、身につき、理解できることであるが、それゆえ、教団の外部から信者を観察し、インタビューをする研究者には、対象集団と距離をとり、客観的であろうとするが故になかなか教えの核心にまで触れることが難しい。これが宗教研究の最大の問題点であろう。これら4つのうちで、研究者にとって、もっとも接近しやすいものは、3番目と4番目に関わるもの、なかでもことばである。教祖によって書かれたものであれ、信者の発言であれ、文字となったものは、客観的な研究対象として利用可能である。この節では、信者のことばをテキスト化し、そこから宗教を理解しようという研究方法の1つである。

書かれたものの代表は、その教団の持つ教典である。しかし、教典もそのまま読んで理解することは、かなり難しい。それは、各教団が自教団特有の数々のことばを用いて、その教えを語ることがその一因としてあげられる。さらに独自のことばでなくても、たとえば「救い」や「感謝」などの多くの宗教に共通するようなことばであっても、それは教団ごとに意味づけが異なっている場合が多い。私たちは、各教団特有の用語、一般的な宗教用語の使い方に良く馴染んでいない。私たちが馴染んでいるのは、宗教学、社会学や日常のことばである。この2つのことばの間には、かなりの隔りがある。しかし、この違いは、明らかに違うことはわかるのだが、どのように異なるかを明確に述べることができない。その違いがわかれば、信仰の核となる部分や霊的な物語を日常世界や学問の世界で使われていることばで記述することが可能となるはずである。本節は、領域ごとにことばの使われ方が違うということを前提に異なる領域のことばの意味を理解しようという試みである[1]。

1. 真如苑の概要

本節で対象とする宗教教団は、真如苑（しんにょえん）である。

真如苑は、伊藤真乗（しんじょう）・友司（ともじ）夫妻が、1936年（昭和11年）に東京都立川市で始めた。友司の死を経て、1970年頃より急成長をした大般涅槃教（だいはつねはんきょう）を所与の教典とする仏教教団である。現在、知名度はさほど高くないが、信者数は、熱心な人だけでも7～80万人程度と推測される教団である。真如苑の最大の特徴は、霊能者による接心修行（せっしんしゅぎょう）である。この接心とは、信者と霊能者が一対一で対座して行なう修行のことで、そこに現れる力のことを真如苑では霊能と呼ぶ。この霊能こそが他人を、また自己を悟りの境地に導く力であるとされている。霊能は、日常生活の中で迷いながら生きている人々のその迷いを吹き消す力である。その力の中には、人々をこの世の苦しみすなわち、剥奪的な状況から救うことも含まれている。したがってこの力を頼り、困難から救われることが、入信のきっかけである人もいる。しかし、真如苑の教主（教祖）伊藤真乗が信者に示した救いは、それだけではない。もちろん、現世の困難で苦しんでいる人は、まず助けねばならない。そして苦難の状況から救われた人はさらに、接心修行により自分の心を正しく立て替えるところから始め、最終的には、悟りを得るところまで修行をする。それが救いなのである。そして、私たちの魂を悟りにまで導いてくれるのが、接心修行である。また、霊能を開発した人々を霊能者とよび、霊能者によって接心は可能となり、霊能者はさらに多くの人々を救いに導くことができる。真如苑では、修行を積み、誰でも霊能者になれるとされている。現在の霊能者の数は、およそ1,600人ほどであるが、熱心な信者は霊能者になることを目標に信仰を続けている。

この霊能は、現在では一気に開発されるものではない。信心の深まりは、真如霊界により判定され、霊位として与えられる。霊位は、大乘、歡喜、大歡喜、霊能の4つの段階が設けられている。霊位が判定される場合は、相承会座（そうしょうえざ）と呼ばれる接心においてであり、霊界の判定結果は、霊能者の中でも特に能力の高い霊能者によって伝えられる。このようにして霊能を得るまでには、入信してから平均して16年の期間が必要である。

2. 調査方法上の試行錯誤

本節は、真如苑の霊能者に対する自由回答の分析をもとにするものである。その結果を報告する前に、自由回答の分析に至った経過を書き連ねることも報告書としては意味あるものと思われるので、以下に順を追って記す。

2.1 教書の研究

まず、書かれたものとして重要なものは、真如苑の教書である。それは、『一如の道』と名付けられている500ページあまりの書物である。しかし、この『一如の道』から真如苑

を理解することはかなり困難である。その理由の大部分は、もちろん、私たちが、一般的な仏教や密教に対して、大して知識を持ってはいないことに由来する。もしそれらの知識なくしては理解できないものであれば、それは、宗教の専門家以外は、扱いうる対象ではないだろう。しかし一方で、宗教的な知識の専門家でない一般の信者は、特に霊能者となるような人は真如苑を理解しているという事はできよう。そのような実際に熱心な信者は、日々精進を重ね、繰り返し繰り返し『一如の道』を読むようであるが、それでもこの教書からだけでは真如苑を理解することは難しいという。つまり、教書だけから真如苑の教えを理解するという事は、宗教の中にいる人にとっても困難であり、ましてや部外者にはわからない。

2.2 インタビュー調査

つぎに、直接信者の話をインタビューするという方法をとった。特に霊能者となった人たちが、どのような過程を経てそこにたどり着いたのかを知ることによって、真如苑を、その霊能を理解できるのではないかと考えた。そこで、教団の社会交流部に協力を依頼し、立川市にある教団総本部で、十数人の霊能者にインタビューする機会を得た。霊能者は、接心修行を通して自分の心の曇を磨いていくことにより霊位が向上し、ついには円満な指導者たる霊能者になる。したがって、よくいわれるようにどの霊能者も強い意志を秘めながらも温和で人当たりの良い人格者であった。しかし、彼らの信仰歴、修行歴は、さまざまであり、淡々と霊位の向上の経過を述べるものもあれば、激しい人間的葛藤や多くの苦難を乗り越えて霊位を向上させたものもいた。そしてその語り口は、私たちが口をはさむことができないほど圧倒的な迫力で迫りくる霊能者もいれば、こちらが聞き出したいことを聞くのに苦労するほど口数の少ない霊能者もいたのである。霊能者を円満な指導者ということば以上にいか様に説明すればいいのであろうか。私たちは、霊能者を知ろうと思ってインタビュー調査を始めたが、インタビューを進めるうちに霊能者を知ることなど不可能ではないのかという思いにとらわれるようになったのである。

その理由の1つとしてまず思いつくことは、霊能にも段階があるということが挙げられる。真如苑の霊能者は、霊能を相承すればそれで修行が終わるのではない。むしろ、そこからが本当の修行であるといわれる。彼らは、霊能者同士で接心修行を続ける。この修行によって、霊能者としての能力が上がっていきとされている。私たちがインタビューした霊能者は、霊能を相承して間もない人から、30年以上も前に霊能者となった人まで、霊能者としての能力でいえば、さまざまであった。このような霊能者としての経験、霊能の違いが、非常に大きく感じられたために、霊能者に共通するはずの霊能の統一したイメージを見いだすことが困難であった。細部にとらわれ、本質が見えなかったのである。

霊能者が語る信仰史ともいえる体験談は、聞いていてとてもおもしろく、インタビュー調査のデータとしては、きわめて質の高いものであった。しかし、それが多様で複雑であればあるほど、具体的で、細部にわたる生き生きとしたものであればあるほど、それを分

析する切り口が見いだせなかった。必要なのは、体験談を分析する枠組みであった。個別の例にとらわれない、思い切って単純化された明快な分析枠組みが必要であった。

2.3 インタビュー調査における分析枠組みの特徴

従来、このような場合には、教義や教祖の自伝などにに基づき、分析枠組みをつくったり、広く日本の宗教伝統に戻って、考える方法が採られてきたように思う[2]。ところがよく考えてみると、体験談やインタビューを用いるのは、人々の心に受け入れられた宗教的な教え、世界観、考え方を人々が語ることを元に分析しようという考えに基づいているはずである。そこで、教義から導き出した枠組みを使い、それになぞって体験談、インタビューのデータを読み解くのでは、体験談、インタビューというデータと教義とのずれを切り捨てることになる。体験談やインタビューの中から切り口を見つけ、それを十分に生かして、人々に受容されている教えを理解するという方向も必要である。

宗教調査においては、インタビュー調査がよく用いられてきた。それは、逸脱行動の研究などと同じく、教祖の霊体験など非常に特殊な事例は、そんなに多くを集めることが不可能であり、統計的調査の対象となつてこないからであり、極端に特異な事例であるからこそ、その事例が生じるメカニズムを解明することは、その他多くの事例を発生させる一般的なメカニズムを導く手がかりとなるからである。このような意味で、特殊な事例のインタビューが、あるいは事例を特殊なものとして位置づけるインタビューが行われてきたように思われる。同じように従来の体験談の事例は、特徴的であるからこそ取り上げられてきた。大規模な集会における体験談の発表、あるいは機関誌等の体験談の発表においては、教団の人、周囲の人などが、推薦、指名する形で体験談を発表される人が決められる。つまりそこには、他の信者が聞いて有意義である特徴的な体験談のみが選別され、発表されるのである。そのような場面ででない平凡な体験談が多数存在しているのではないだろうか。それこそが、ふつうの人々の体験談ではなからうか。そのような意味で、本節が焦点を当てるのは、多数の人々の信仰史であり、事例的な手法より統計的な手法で今まで見過ごされてきた側面に注目しようという試みである。

2.4 事例の代表性と分析の客観性

インタビュー調査は、対象となる事例、事象において、様々な要因が複雑に絡み合って生じるような場合、それをあるがままの姿でとらえ、いきいきと描写することによって事象の意味を理解することができる。そのためにインタビューは、少数の人に対して長時間話を聞くことになる。したがって、少数の事例に限られるため、それが必ずしも全体を代表しているという保証がない。それは、今回の場合、時間的に多忙な霊能者のうち、たまたま私たちが立川の総本部へ行ったときに時間を割きうる人々に対してインタビューしたに過ぎないため、思わぬバイアスがかかっているかもしれない。

これは、調査法上の問題として考えると、統計調査法に対する事例調査法の問題点とい

える。事例調査は、このような先に挙げた長所の一方、またこれらが長所であるからこそ生じる次の2つの欠点が指摘されてきた。それは、事例の代表性と分析の客観性である。

調査対象となる母集団を代表する事例を多数集めることができない。これは、教祖の側から、神話の側から、上からの宗教的教え、世界観を考える場合には、確かに不可能であろう。教団に固有の神話、物語、他の人々が追随し得ない極度に高次なそして特異な教祖の霊体験などは、多数集めることは事実上、不可能である。ところが、本節が基づくように、宗教文化も大衆化され、人々の体験談となって形を表わすと考える立場に立ち、その中から人々の、民衆の宗教的世界観をくみ取ろうとする方法を探るならば、多数の標本を採り、母集団を代表させることも可能である。もちろん、そこには、時間、費用、教団の協力などの条件が整うことは必要であるのはいままでもない。

第2の客観性は、調査者の解釈が、客観的であらねばならないということを主張しているのではない。事例の持つ生き生きとした魅力あふれる記述は、偏に調査者の主観的解釈によっているのであり、またそれが妥当であるからこそ読者を納得させ、共感を生むのである。主観的な解釈は、統計的な調査においても、それなくしてはまったく無味乾燥した単なる記述に終わってしまうものである。ただし、その解釈が妥当でない人を惑わすような結果になるであろう。妥当性について、普遍的に単純に、これ以上論じることはできないが、最低限明確なことは、妥当であるためには、信頼性が必要であるということである。信頼性とは、「同じ対象を、同じ方法で複数回測ったとき、その測定結果は統制外の要因によるランダムな変動の影響で若干のバラツキはあっても、かなり一貫した傾向を示す[3]」ことである。この信頼性に関しては、さらにいくつかの側面に細分化して論じることもできるが、体験談の分析に関して特に問題となる点に限って、さらにわかりやすく言い換えれば、「同じサンプルに対して同じ道具を使って異なる研究者が測定を行なったときに同じ観察結果が得られるほど、その測度は信頼できる[4]」という表現になろう。現在の宗教研究では、インタビュー調査や体験談の分析において、同じデータを異なる研究者が分析した場合、果たして同じ結果が得られるであろうか。おそらくは、先に分析した者が、どこからどうして結論にいたったのか、想像にすら苦しむのではないだろうか。また、後から分析をする者が異なる解釈の可能性を見いだせるデータを見つけたとき、先の分析者はそれを除外したのか、それとも気づかなかったのか判断できるであろうか。

以上のことから、分析の手順を客観的に示すことが必要であると考えられる。それは、信頼性があるかどうかを判断する基準となるからである。もちろん信頼性があるからといって、妥当性が保証されるのではない。しかし、信頼性がないものは、必ず妥当ではあり得ない。つまり、信頼性は、妥当でないものをのぞく助けになるのである。したがって、信頼できるかどうかを判断できる状態で結果を提示すること、つまり分析の手続きを示すことは、可能ならば進んで行なうべきことである。

以上の検討は、もちろん、事例研究が無意味であるというものではない。代表性や客観性は、乗り越えられないものとしてある場合もあり、それにも関わらず優れた事例研究は存

在する。しかし、その欠点を少しでも補える方法を以下に試みてみたい。

3. 自由回答の項目とコーディング

以下で扱うデータは、真如苑の霊能者を対象に行われた質問紙調査で、自由回答法によって集められたものである[5]。分析に用いた質問項目は、以下の4項目である。

A : 「あなたにとって、大乘を相承する際にもっとも重要な取り組みは何でしたか。自由にお答え下さい。」

B : 「あなたにとって、歡喜を相承する際にもっとも重要な取り組みは何でしたか。自由にお答え下さい。」

C : 「あなたにとって、大歡喜を相承する際にもっとも重要な取り組みは何でしたか。自由にお答え下さい。」

D : 「あなたにとって、霊能を相承する際にもっとも重要な取り組みは何でしたか。自由にお答え下さい。」

真如苑の霊能者は、大乘、歡喜、大歡喜の各霊位を順に相承した後に、霊能という霊位を獲得する。このような各霊位ごとに相承する際の取り組みを答えてもらった。このような質問が、他の新宗教の研究でも用いられるかどうかは、検討せねばならないが、少なくとも真如苑の霊能者においては、以下のような2つの理由で、有効であると考えられる。

第1に、真如苑の霊能者の場合、霊位の相承時の取り組みで、霊能者の信仰上の意味あるできごとの多くをカバーすることができるからである。霊能者は、入信してから霊能を相承するまでの間に多くの人が10年から20年の月日を要しており、また、またその間に4つの霊位という区切りがある。それぞれの霊位が、人々にとって大きな壁となって、その相承に向けて、苦しみ、努力するという傾向がみられる。もちろん、1つの霊位の相承と次の霊位の相承との間に、その人にとって大きな信仰上の出来事があるかもしれないが、それらの多くもその事件を乗り越えることが次の霊位相承につながるように思われる。

第2に一般的に自由回答が避けられる理由の1つは、その回答率が、他の選択肢を選ぶ質問と比べると低く、また長さも短いものが多いからである。ところが、本調査の結果ではこれらの質問に対して、ほとんどの人が答えを記入してくれた。この自由回答の質問に対して、回答しなかった人は、英語で回答した外国人の4人を含めても、大乘で、21人(3.4%)、歡喜で、14人(2.3%)、大歡喜で、18人(2.9%)、霊能で、11人(1.8%)と

極めて低い割合である。また、その回答の長さは平均しておよそ 100 字程度であった。中には数百字にも及ぶ回答もあった。100 字程度の長さがあれば、十分に文としての意味があり、分析に値する。この回答の率の高さ、また、回答の長さは予想に反したものであった。これは、霊能者が常日頃、各種の集会などで、霊位向上に沿って、自分の体験談を語りなれていること、そして体験談を語ることが、他の信者に対しての指導であり、霊能者のつとめであることをよく認識しているからであろう。

このようにして得られた自由回答をすべてテキストデータとして入力した。活字ならばスキャナと OCR ソフトを用いてテキストデータ化するという方法もあるが、今回のデータは、霊能者に記入してもらったものであり、手書き文字であるため、データは、業者にパンチしてもらった。そのような入力を行う業者は多数あり、また、費用も 1 文字あたりおよそ 2 円程度であり、破格に高価というほどのことはないが、今回の回答文中には、数多くの真如苑でしか使われないような特殊な用語が手書きで用いられているため、チェックなどに多少普通の入力よりは労力が必要であったため、少し割高になっている。

さて、こうして得られたデータは、AUTOCODE プログラムを用いて、コーディングされた [6]。

この AUTOCODE プログラムを使って、コーディングする場合の一番のポイントは、コード化が必要と思われる「部分」をどの単位に定めるかということである。内容分析の場合、メッセージに現われる命題、人物やテーマなどより大きな分析単位が扱われる場合もあるが、もっとも紛れがなく、また、AUTOCODE プログラムの特徴が生かせるのは、比較的短い語を単位とする方法である。それも、英文の場合には、前置詞をのぞいては、名詞、形容詞、副詞、動詞などの各品詞ごとに区別し、その頻度を数えるプログラムが開発されているが、日本語の場合、語の区切りを機械的に出力することは非常に難しい。したがって、品詞に関係なく、適度な長さの語を単位とする。

語を取り出す上で重要な点は、語を意味の文脈からできるだけ切り離して取り出すことである。その理由の第 1 は、意味の文脈を完全に理解することは可能かどうか疑わしいからである。ここでいう意味の文脈とは、真如苑の信者の中で使われ、常識化している意味である。この文脈を理解するためには、真如教学に通じる必要があるであろうし、また宗教学的な知識にも通じる必要があるだろう。また、それ以外にも儀式、接心、家庭集会の中での応答などの様々な体験から得られる知識もよく理解せねばならないだろう。しかし、これらを完全に身につけることは、研究者にとっては不可能である。宗教的文脈が方法論的に十分に理解できないのであれば、逆に宗教的文脈を依存しない方法を考えるのが、1 つの解決策といえよう。第 2 に、たとえ宗教的な意味に通じたとしても、そもそも人間が、多数のケースに常に同じ様にコードをふるかどうか疑問なのである。文脈の中の単語を識別するためには、教学的な知識とそれに基づく細かな段階ごとの識別の基準、そしてその膨大な数の基準にしたがって、確実にコードを振るというプロセスを実行しなければならない。これらの点から、人間が訓練を重ねても誤りなくコードを振ることは不可能で

ある。しかし、ここでコンピュータを利用すれば、どんなに膨大なケース数であってもどんなに複雑なコーディング基準であってもプログラム化される限り、正確にコードをふるることができる。したがって、信頼性を高めるためには、機械ができる形でコードを振ることが必要である。コンピュータが驚異的に発達し、人工知能や自然言語処理が目覚ましく発達した現在でも、十分に日本語の文脈をコンピュータが理解するシステムは実用化されていない。すなわち、コンピュータを利用する限り、語を意味の文脈とは関係なく取り出し、そこから新たに意味を理解する方法を考えることが必要なのである。

以上の理由から、文章から意味を考えることなく文字列を切り出すことにした。それを整理し、意味の似通っているものを1つのカテゴリーとしてまとめ、コーディングルールファイルを作成した（付表1を参照）。

4. コーディングの結果

自由回答の中から極端に少ない文字列、意味のない文字列をのぞき、490の文字列を選び、それらをまとめて45のカテゴリーを設けた。なお、1人の霊能者が、1つの霊位を相承するときに1つの文字列を複数回回答の中に入れていてもそれは1回に数えた。たとえば、「両親に感謝し、教主様に感謝する」という場合の「感謝」は、1回にしかカウントしない。これは、複数回同じ文字列を使う人が、1回しか使わない人と比べてその程度が強いとは判断しないという前提である。各霊位ごとのカテゴリーの頻度は、表1に示すとおりである。たとえば大乘を相承する際の取り組みに対する回答に「教主さま」という文字列を使った人が、66人、「摂受院さま[7]」という文字列を使った人が、19人いることを示している。

この霊位相承の取り組みの一覧表をみると、内容によって、いくつかに分類できる。

まず、第1は、教主一家の人々に対する言及である。これは、左端の数字の1から6までである。第2は、8から20までで、これらは、真如苑独特の用語も含む宗教的な用語である。

表1 取り組みの単純集計 結果

	大 乗	歡 喜	大歡喜	靈 能
1 教主さま	66	70	104	138
2 摂受院さま	19	33	43	43
3 双親さま	65	74	85	140
4 両童子さま	34	55	54	79
5 常慧さま	1	1	12	22
6 継主さま	0	1	5	23
7 教え	226	194	223	230
8 教書	27	15	16	35
9 靈的なもの	23	37	41	67
10 靈的障害	2	7	15	13
11 会座	33	17	18	17
12 靈位	14	22	23	7
13 靈能開発	5	6	12	58
14 接心	40	34	23	37
15 無相接心	0	3	9	19
16 宗教用語	117	118	96	112
17 因縁	18	27	26	9
18 業	3	9	10	17
19 三業浄化	10	26	21	21
20 懺悔	9	14	26	34
21 家族・親戚	186	183	193	204
22 その他の関係	48	57	48	53
23 その他の人	83	115	95	100
24 先祖	17	9	13	29
25 お仕え	22	48	68	81
26 おまかせ	150	85	135	224
27 とらわれのない心	117	210	175	244
28 すなお	29	12	14	31
29 みつめ	25	79	77	97
30 感謝	135	168	148	208
31 よろこび	103	146	112	94
32 きよめ	14	19	26	34
33 祈り	52	64	80	116
34 修行	26	37	51	68
35 足もと	28	49	63	74
36 ご奉仕	50	57	52	30
37 救い	41	32	28	47
38 歩み	77	61	36	28
39 経・部会	164	188	162	97
40 お役	7	23	25	16
41 和合	19	42	40	27
42 護持	5	14	45	58
43 帰依	4	9	7	7
44 実践	46	58	41	58
45 精進	39	47	48	42

第3は、21から24までで、これらは関係する人々のカテゴリーと考えられる。「先祖」もここに含めた。さらに第4番目のカテゴリーは、取り組みの内容ともいえるべきもので、25から32までがこれに相当する。5番目には、実際の修行や実践の中身といえるもので、抽象的なものが多いが、33から45までをひとまとめに考える。この中には、「経(すじ)・部会[8]」が含まれている。

それでは、この5つの分類にしたがって、重要なコードの内容を説明しながら、全体を見渡しておく。

まず、教主一家についての言及であるが、特に「教主さま」、「双親さま[9]」の言及が多い。「摂受院さま」単独の言及は、それほど多くはない。また、教義上重要な、「両童子さま[10]」への言及も教主、双親さまに次いで多い。「常慧さま[11]」、「継主さま」は、このことばが登場した時期が、かなり遅いことを反映して、少なくなっている。また、この第1の分類の中で多い「教主さま」、「双親さま」、「両童子さま」は、いずれも大乘、歡喜、大歡喜、靈能と靈位の段階が高くなるほど多くなる傾向を示している。また、各靈位において、複数の人が言及されていることが多い傾向があった。それぞれのコードに含まれる文字列の一覧は、ここではその内容がわからないようなものは、含まれていないと考えるが、コーディングルールファイルを参照すれば、正確に理解できるであろう。具体的に「教主さま」が、言及されている例を一例挙げる。

「肉体的にも精神的にも弱かった自分自身が今日生かされていることに対し、教主様、摂受院様のお命かけられた道のりに深い思惟と感謝を深めさせて頂いたこと。」

次の7から20までの宗教的な用語に関しては、いずれの靈位においても「教え(教え、教学、み心、御教えなど)」のコードが、200前後、「(7から20までの他に含まれない)宗教用語(常楽我浄、抜苦代受、顕幽一如、上求菩提、世間法、如来法など)」のコードが、100前後と多かった。この2つは、靈位の向上につれて増えるといったような関連は見られない。次にあげるのは、「教え」の例である。

「仕事と教えを両立させていく事。それには教えの事だけに費やす時間を作る事でした。」

21から24までの言及される人は、特に、「家族・親戚」への言及が多い。このような身近でその関係も緊密で強い家族や親戚ともっとも対極にあるのが、「その他の人」のコードである。これには、「他人」や「相手」、「他の人」、「周りの人」などの一般化された他者を主に含んでいる。これも各靈位を通じて100人前後と多い。また、「その他の関係」というコードには、「知人」、「友人」、「近隣の人」、「会社」、「職場」などの文字列が含まれている。

以下には、「家族・親戚」と「その他の関係」は、省略し、「その他の人」の例のみを挙げておく。

「他人の言うことをよく聞き入れ、自らの心のたてかえとする取り組み。」

取り組みの内容の中では、「おまかせ」、「とらわれのない心」、「感謝」、「よろこび」の4つが、100前後から250近くまでの度数を示している。

「おまかせ」は、「お任せ」、「生涯かけて」、「絶対帰依」、「命をかけて」、「貫く」などの文字列が含まれる。歡喜の段階で少し少ないのが、特徴である。

「総べて一さいをお任せの心に成らさせて頂く事が出来たと思います。金色に輝く教主様の御尊願に唯帰依合掌でした。」

「とらわれのない心」は、「我」、「自分の足りなさ」、「自分をたてたい」、「本性」、「心癖」、「とらわれ」、「執着」、「傲慢」、「反発」などが含まれる。歡喜、靈能の段階で200を越え、特に多い。

「自分という我を捨て切る事でした。特に三業浄化に取り組み、どうしても自分を守りたくなる自分を清める事に取り組みました。」

「感謝」に含まれる文字列は、「感謝」、「報謝」のみであるが、靈能の段階では、200を越えて、特に多い。

「家族の中で一番身近な妻に対して、感謝をさせて頂いたこと。今まであたりまえのことだと思っていた一つ一つに感謝をさせて頂くことが出来ました。」

以上の「おまかせ」、「とらわれのない心」、「感謝」はいずれも靈能の段階では、他の段階と比べて多く、いずれも200を越えているのが特徴である。それに対して「よろこび」は、歡喜の段階で多い傾向がみられ、靈能の段階では大乘、大歡喜の段階とそれほど差がなく、上の3つとは、異なる傾向を示している。

最後の分類である実際の修行や実践の内容の中で、「祈り」は、大乘では52と少ないが、靈位の向上とともに増加し、靈能では、100を越える。

「靈的な認識を深める為に、日常の生活で祈りを深めてゆくこと。家族、所属、先祖の心になって行動してゆく。」

「経・部会」は、大乘、歡喜、大歡喜の数と比べると靈能では、100をわずかに下回り、前3者のおよそ3分の2と少なくなっている。なお、この「経・部会」には、導きの親子

関係も含めて考えたため、お導き、お救け[12]などのことばも含まれ、所属[13]、経親[14]、部会、部長、集会などのことばも含まれている。

「所属に経立てして頂く事を中心に取り組み、家庭内にも心からの精進が出来るように外見、型ちだけが出来て、肝心なき歩みにならないよう一生懸命取り組みました。」

経や部会ということばは、対象を指し示すだけではなく、この例のように所属に組み込むというようにも使われ、取り組みの内容としても考えられ、また、3つの歩みの1つとしてのお救けを含むことから実践の内容の1つとしても考えられる。

このようにことばは様々な意味で使われる。それは日常生活において使われることばも同様であるが、信仰の中においては、普段日常生活において暮らしている私たちが思いもよらないような新たな意味付けで用いられることも多い。また、多くの宗教的常識から判断される意味からとも異なる新しい意味で使われていることばがあるかもしれない。もしあればそれが、宗教の教えの新しさ、独自性といえるであろう。そこで、まず最初の段階としては、ことばを意味からできるだけ切り離して考えようとするのである。つまり、最初の段階では、私たちが日常生活で使っていることばの意味、世界観から、ことばの関連を考えることをできるだけ排除するのである。日常生活から、あるいは従来の宗教的世界観からことばの意味を判断すると、それは真如苑の中では誤りとなる可能性が、大いにあるからである。ともに使われることばによって変わってくることばの意味は、ことばを切り出した後にそのことば同士の間から考えていくという方針で分析を進める。

5. コード間の関連

つぎに各霊位ごとにコード間の関連を調べてみた。まず、45のコードの中で、その度数が、およそ50に満たないコードは、除いた。度数の少ないものは、多くの場合分析結果に重要な意味をもたらさないばかりでなく、時には他のコードとの関連の中で誤差が大きくなり過ぎるというマイナスもあるからである。この結果残したコードは、「教主さま」、「双親さま」、「両童子さま」、「教え」、「宗教用語」、「家族・親戚」、「その他の関係」、「その他の人」、「お仕え」、「おまかせ」、「とらわれのない心」、「みつめ」、「感謝」、「よろこび」、「祈り」、「修行」、「足もと」、「ご奉仕」、「歩み」、「経・部会」の20の変数である。これらの変数は、それぞれの文字列が、霊位の取り組みの中に出現した人が、1、出現しなかった人が0の値を取る。つまり、これらの変数は、2値変数である。2値変数間の関連を調べる測度は多数あるが、ここではジャッカードの類似性測度を用いた[15]。その関連の表の中で、特に.2以上の比較的高い関連を示した数値に注目してみる（表は省略）。

まず、大乘における関連を調べてみる。すると、大乘で比較的高い関連が見られたものは、「双親さま」と「両童子さま」、「教え」と「おまかせ」、「家族・親戚」と「感謝」の3

つの組であった。つまり、「双親さま」と「両童子さま」を例に言い換えると、大乘を相承する際における取り組みの中で、「双親さま」か「両童子さま」ということばに言及した人の中では、両方ともに言及した人の割合が比較的高いことを意味しているのである。同じように「教え」と「おまかせ」、「家族・親戚」と「感謝」ということばの組においても両方ともに言及した人の割合が高いのである。

これらのことばの組が取り組みの内容に対する答えの中に同時に言及されることは理解しやすいであろう。「双親さま」と「両童子さま」は、教主一家の人、特にすでに霊界にいる人たちであり、真如苑の霊界をつくり、清浄に維持している人たちである。「教え」と「おまかせ」は、教えにおまかせすると考えられ、「家族・親戚」と「感謝」は、家族に感謝するという取り組みだと考えられる。これらはいずれも非常にわかりやすい結びつきである。そして、この3つの組み合わせは、歡喜の「教え」 - 「おまかせ」の組み合わせを除いて、歡喜、大歡喜、靈能の各段階で見られる組み合わせであり、また、「双親さま」と「両童子さま」、「教え」と「おまかせ」は、靈位の上昇とともにその関連は、次第に強くなっていることがわかる。歡喜で見られる関連は、4つの靈位を通してみた場合、少し異なる組み合わせに見える。これは、表1の単純集計をみてもある程度予想されることである。他の3つの靈位と比べて歡喜の靈位だけが特徴的な点は、「教え」、「おまかせ」が少なく、「喜び」や「経・部会」が多い。これらの点が関連の強さに影響しているのであるが、これが歡喜という靈位の特徴であるかどうかについては、現時点では判断しがたい。今後注意深く分析し、検討したい。

さて、大乘から大歡喜へと目を移すと、先ほどの3つの組み合わせをつなぐような関連がでてくる。つまり、「教え」と「双親さま」、「教え」と「家族・親戚」、「教え」と「感謝」、そして、「双親さま」と「感謝」である。つまり、教えということばを中心に、3つの組が関連しあってくるのである。(以上のほかに「教主さま」と「教え」、「よろこび」と「感謝」の関連が高いが、「教主さま」は、「教え」以外のどのことばとも関連が高くなく、「よろこび」は、「感謝」以外のどのことばとも関連が高くない。このように一つとしか関連しないものは、図の中からは除いた。)

次に表5の靈能へと移ると、大歡喜で見られた結びつきはすべて現われている上に(「双親さま」と「感謝」の関連は、.196で大歡喜の.201とほとんど変わらない)互いの結びつきはさらに増え、また、「教主さま」と「祈り」と「とらわれのない心」が現われる。(大歡喜の場合と同様に、1つの関連しかないものは除いた。)
「教主さま」と「祈り」が、教義的なものの関連、すなわち「教え」、「おまかせ」、「双親さま」間の関連を強化し、「とらわれのない心」が、取り組みの課題といえる「おまかせ」と「感謝」のあいだを「教え」とつなぎながら強化している。

これらの関連を図に示したものが、図の1から3である。つまり、大乘で見られたバラバラの3つの結びつきが、靈位の向上とともに特に教えということばを中心に結びつけられていくさまが描かれる。

図1 大乘の関連図

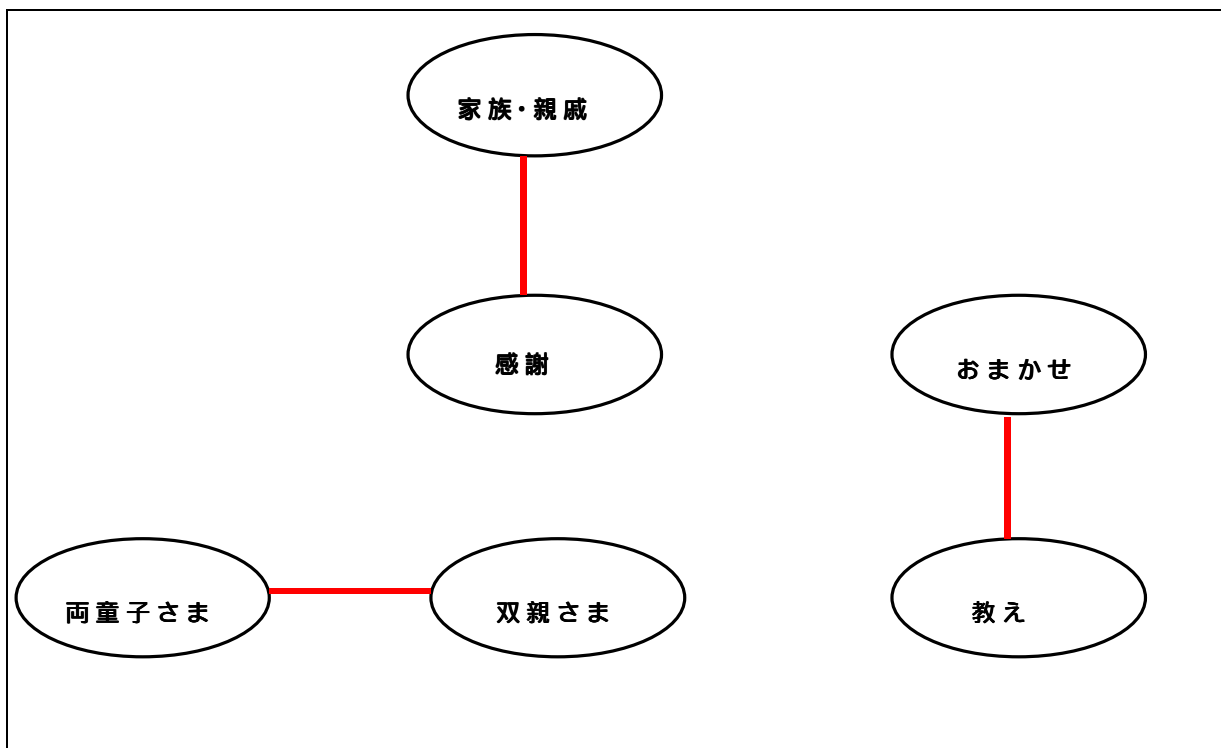


図2 大歓喜の関連図

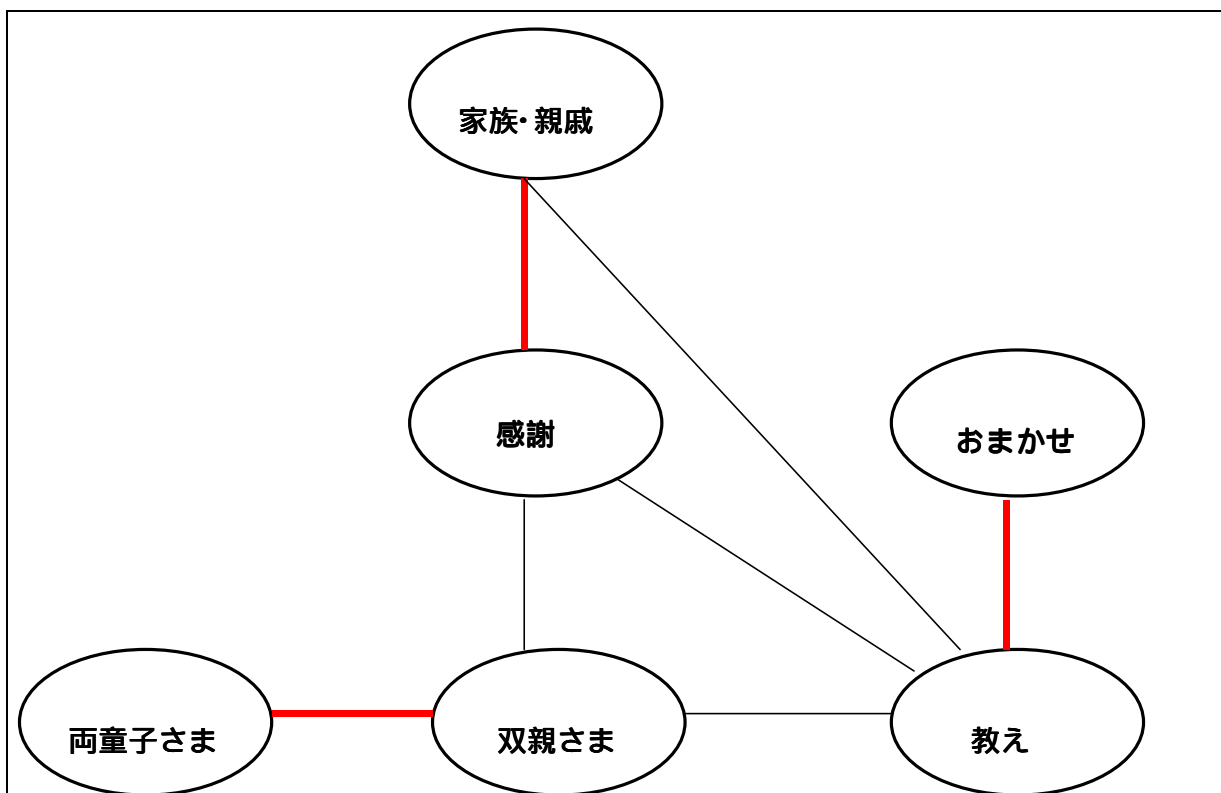
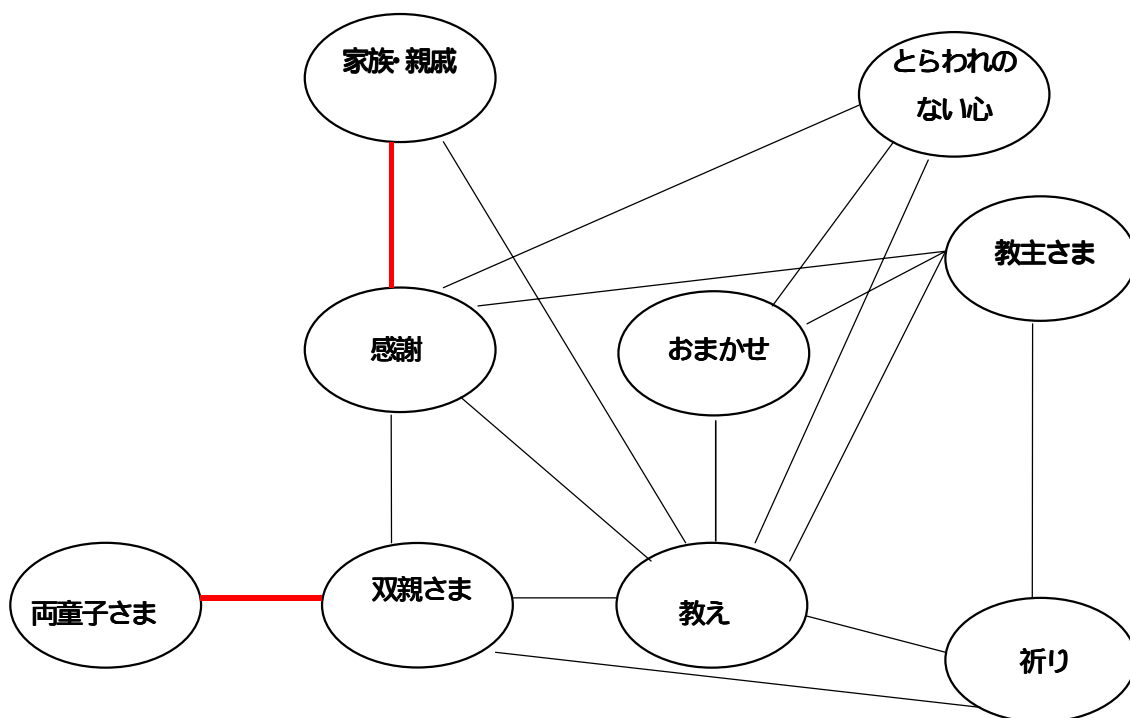


図3 霊能の関連図

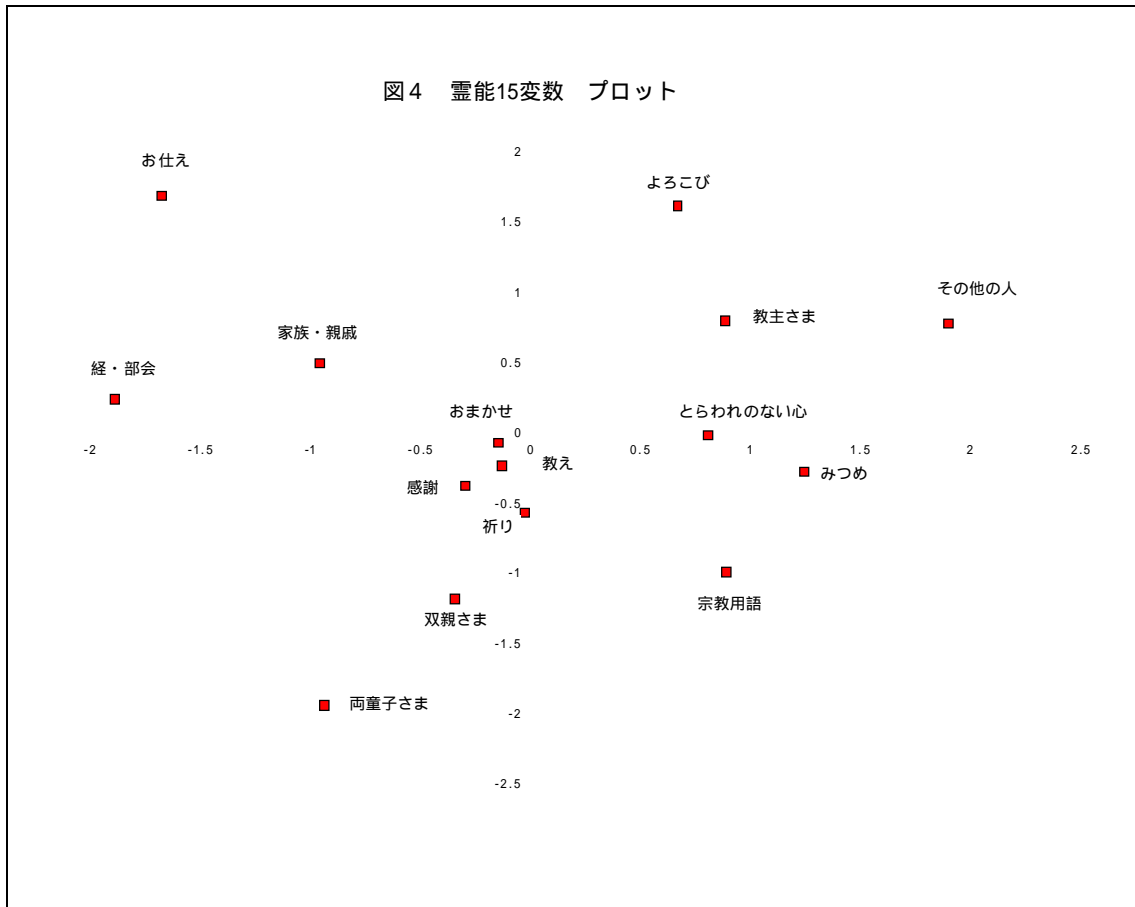


6. ALSCAL の結果

このようにして明らかになった霊能での段階でのことばの結びつきをより洗練された形で示すために多次元尺度構成法を用いた。

用いた変数は、霊能の段階の取り組みの変数の中からジャックカードの類似性測度で関連が高かった「教主さま」、「双親さま」、「両童子さま」、「教え」、「宗教用語」、「家族・親戚」、「その他の人」、「お仕え」、「おまかせ」、「とらわれのない心」、「みつめ」、「感謝」、「よろこび」、「祈り」、「経・部会」の15変数である。これらの変数のジャックカードの類似性測度を計算した類似性行列を順序尺度として扱い、非計量多次元尺度法を用いて分析した[16]。

まず、最初に次元の数を決めなければならない。15変数の場合、3次元以上にすると、推定すべきパラメータの数が、類似性行列のデータの値の数よりも相対的に多くなりすぎ、信頼性が損なわれる危険性がある。そこで、2次元の解を用いた。適合度は、STRESS1が、0.225、RSQが、0.730であった。この2次元解の15変数の座標をプロットしたものが、図4である。



この図4は、これだけでは解釈しづらいが、ジャッカードの類似性測度の分析で明らかにされた図3と比較すると、解釈が容易になる。まず、図3で核として考えた「双親さま」と「両童子さま」、「教え」と「おまかせ」、「家族・親戚」と「感謝」の結びつきを、図4において見いだしてみよう。これらの対が必ずしももっとも近くに位置しているわけではないが、比較的近いところにこれらの対を見いだすことができる。なかでも「教え」と「おまかせ」がきわめて近く位置している。そして、その対の近くに「感謝」があり、左上の方向に「家族・親戚」があり、さらに左に目をやると、「家族・親戚」の近くに「経・部会」、「お仕え」が、位置している。「お仕え」は、家族に対してお仕えするという意味で理解しやすく、「経・部会」もそこに導きの親子関係を含む真如苑の中での親子関係の反映ということで、家族・親戚との近さは、理解できるであろう。「お仕え」、「経・部会」から「家族・親戚」を通り、「感謝」と「教え」-「おまかせ」から、「祈り」、「宗教用語」と右下へ進んでいくと、世俗的關係、倫理から宗教的なものへというラインを想定することができよう。そして、この「教え」-「おまかせ」の結びつきと、「祈り」、「感謝」のことはの間には、緊密な関係があることがわかり、核となる部分といえよう。これらから、「教えに祈りを込める」とか、「教えに感謝する」など、きわめてよく用いられる表現をすぐさま連想す

ることができる。

左の下の方向には、「双親さま」 - 「両童子さま」の対があり、「双親さま、両童子さまに祈る」という表現を思い浮かべることができる。右の方に目をやると、「教主さま」が意外と中心部から離れ、「とらわれのない心」が、近くに位置している。「とらわれのない心」の近くには、「みつめ」があり、自分の心を見つめてとらわれをなくすという意味に解釈できるであろう。「教主さま」の解釈は難しいが、少なくとも教主さまは、教主一家の中の単なる一員ではなく、特殊な位置を占めていることがわかる。教主さまへの言及は、双親さまや両童子さまへの言及と異なり、単に個別的、特定の教主一家という人々への言及ではない。とらわれのない心の現われ、すなわち接心において霊能者が信者の心を写す鏡となるような霊能力の象徴として教主は考えられているのではないだろうか。また、X軸の左側には、家族・親戚から経・部会といった日常生活と真如苑の中での緊密な人間関係が現われているのに対して、右側の極には、その他の人というもっとも一般的、普遍的な他者が現われている。多次元尺度構成法では、そもそも軸に意味はない。一般的には、軸のプラス、マイナスが、意味ある方向性を示し、解釈できるものではないが、この分析においてはX軸は、プラスになるほど（右へいくほど）普遍性を示していると考えてもおかしくはないだろう。したがって、「教主さま」ということばは、一般的、普遍的な語の真ん中に位置づけられているため、霊能者の人々は、教主を、普遍的な救いを体現する抽象的な人物と考えられているのではないかと推測できよう。

以上の分析の結果は、次の点で重要である。

第1に、大乘の図が、特に教団の教えに染まっていない初心者の図を示していることに注目しなければならない。大乘の図でみられた感謝の観念、おまかせの観念は、特定の宗教に属する人に限らず、日本人全体のもつ宗教心としてよく挙げられるものである。感謝するということ、恩を感じその恩恵に感謝するということは、その対象が具体的な家族などであるか、それとも抽象的、一般的な天地や宇宙であるかという違いはあるにせよ、宗教あるいは道徳、倫理としてもよく言われることである。また、他力本願ということばが使われるように、救済は自力でなされうるものではなく、なにか外の力に依存することも珍しい考え方ではない。その力は、宇宙や世界をつくり、あらゆる生命を生かし続けているものであることが多いが、そのような力、あるいはその力を発揮するものへの依存する事によって救われるという考え方は、かなり一般的なものであろう。

また、大乘の段階ではこのような日本人の宗教心に基づく形の図であるため、まだ真如苑の教えに深くなじんでいない多くの人にとっても決して取っつきにくいものではなく、入りやすい世界であるといえよう。したがって多くの人を取り込みやすい。教えの入り口としては適切な形をこの図は、示しているといえよう。

第2に霊能の図は、日本人一般の図とも言える大乘の図をもととはしているが、それからかなり複雑になっており、訓練を経た信仰者の図であるといえる。そしてそれは、複雑には見えるが、端的にその特徴を述べれば教えというものが中心に他のことばが関連づけ

られているといえるのである。このように同時に用いられることばの変化は、世界観の変化を意味している。つまり、これらの図から、霊能者となった人は、真如苑の中で霊位向上に努めるうちに新たな世界観を獲得すると解釈できよう。さらに換言すれば、これらの図は、真如苑の霊能という目に見えないものを調査結果という形で示したものと言える。

真如苑の霊能者にインタビューしてみると、明らかにこれらの人々は抑制され、落ちついた円満な指導者にふさわしい人格者であることが感じられる。その明確さの一方、真如苑の霊能とは何かということになると、全くわからなくなる。それを説明できることばが見あたらなくなるのである。これは接心を受け、霊位向上に歩み始めればすぐに体験でき、霊能者の人間的すばらしさと同様にすぐに感覚的に了解できることなのであろう。しかし、宗教の外から研究するものにとっては、霊界の存在、霊能の力、その不思議を一目で了解し、納得することは難しいものであった。つまり、目に見える形で示すこと、それはことばでも図でも良いのだが、それができなかったのである。それに対して、この霊能の図は、霊能者たちが身につけていく世界観を示している。これが、非常に観察しにくい霊能の世界をデータ分析によってみることである。

また、第3にこの霊能の図をもとにインタビュー調査の結果を分析することが可能となった。様々な体験を語る霊能者のインタビューを分析する糸口となったのである。私たちは霊能者へのインタビューに取り組んだが、それを分析する切り口を見つけることができなかった。多種多様な自分の信仰史を話す霊能者たちをいったいどんな軸で切っていけばよいのかわからなかった。ところが、霊能者に対する自由回答を AUTECODE プログラムによってコーディングし、コード間の関連の度合いをもとに分析を進めるという方法によって、真如苑の霊能者の世界観を明らかにすることができた。そこで明らかになった「家族・親戚」に対する「感謝」、「教え」に「おまかせ」、「両童子さま」や「双親さま」という教主一家の人々などのことばを軸に、それらに絡まる「教主さま」、「祈り」、「とらわれのない心」などのことばに注意して、今一度霊能者のインタビューを振り返ることによって、彼らの信仰史が物語として、意味を持って浮き上がってきたのである。その分析結果については、機会を改めて論じたい。

重要なことは、この世界観、インタビュー調査の切り口は、教書の熟読や霊能者へのインタビュー、文字で書かれたあるいは集会での体験談の中では見えてこなかったものであるということである。そしてまた、この切り口は、教義や教団の手を経た体験談とは直接関係なく、それらを前提や予断として持たずに、信者の生の声、直接のことばの中から作り上げた分析枠組みである。つまり、教祖の側から、神話の側から、上からの宗教的教え、世界観ではなく、普通の信者である人々の宗教意識、人々の体験、人々の信仰史に基づいているという点が特徴として挙げられる。

このように、インタビュー調査の事例を分析する枠組みを、代表性と客観性のある統計調査としての内容分析を用いることで作り上げることは、事例調査の欠点を補う有効な方法であろう。コンピューターのハード、ソフトの発達によって、この方法も発展するのだら

う。この方法の成功にコンピュータの発達は不可欠である。しかし、もっとも大事なことは、大乘の図を「発見」したことである。大乘の図が、モデルとなって、霊能の図の理解が可能となったのである。もし、大乘の図がなく、最初に図4のプロットを見たのでは、霊能の世界を解釈することは困難であろう。それが、最初に霊能者のインタビューをして、霊能とは何かがわからず困惑していた状況であろう。

私たちのよくわかっている領域は、世俗の社会である。私たちがわからない、知りたい領域が、宗教の世界である。世俗社会は科学的合理的世界である。私たちの世界を基準に、霊能者の世界が見えれば、霊能者の世界を理解することができる。たとえば、私たちの世界と霊能者の世界では、ここが似ていてここが異なるという形で示されれば、かなりわかりやすくなるであろう。ところが、合理的、客観的な私たちのものの見方、考え方が、私たちの目をふさぎ、宗教の世界を理解させない。私たちの世界と霊能の世界ではあまりにも違いすぎる。違いが大きすぎて、私たちの合理主義的学問的な世界と霊能者の世界を比較する事は難しい。私たちの考え方と霊能者の考え方では、違いすぎて比較できないのである。そこでどうするか。媒介項として、大乘の図を用いるのである。この大乘の図は、言い換えると民俗宗教心の図であった。民俗宗教については、たとえ霊能者でない私たちにも通じる日本の文化的背景であり、感覚的にも共感でき、また、学問的なことばでも、少なくとも部分的にはとらえられている。それは、恩であるとか、感謝であるとかということばである。これを基準とするのである。この世界を基準として、霊能の世界を同じ様式で表し、その類似点と相違点によって、霊能の世界を理解しようという試みである。つまりは、類似点を持つ世界、つまり大乘の図を発見したことによって、理解ができたのである。このような基準となるもの、何を類似点として見いだすかということ、これが見いだしにくいので、理解が困難なのである。したがって、民俗宗教心に当たる世界をより明らかにし、モデルとなる形で、より精緻化していくことによって、さらに霊能の世界、宗教の世界観も明らかになるとも考えられる。それは計量的な分析に限らない。理論的なモデルでももちろん有用な寄与につながると思われる。

注

[1]日常世界のことばと学術用語の隔たりを考えることの重要性については、宮原浩二郎『ことばの臨床社会学』ナカニシヤ出版、1998年、の考察も参考となった。

[2]たとえば、島藺進『救いと徳』弘文堂、1992年、第1章。

[3]芝祐順・渡部洋・石塚智一編『統計用語辞典』新曜社、1984年、121頁、信頼性の項参照。

[4]ボンシュテット・ノーキ『社会統計学(学生版)』ハーベスト社、1990年、12頁。

[5]この調査については、63頁参照。

[6]AUTOCODEプログラムの使い方は、第1部第1章を参照されたい。

[7]摂受院さまは、真如苑の教主伊藤真乗の妻友司のことである。

[8]経(すじ)は、真如苑の信者組織の末端の組織の名称である。経が集まって、部会が構成される。

[9]教主と摂受院の2人をあわせて双親さまと尊称される。

[10]教主夫妻の長男と次男のこと。幼くして亡くなっており、真如霊界の創造に深く関わっているとされる。

[11]真如苑では、教主夫妻の三女と四女が後継者とされ、両者を併せて常慧さまと呼ぶ。特に三女だけを指すときは、継主さまと呼ぶ。

[12]「お導き」も「お救け」も真如苑に入っていない人を入信させる(導く)ことをいう。

[13]「所属」とは、自分が導いた導きの子やさらにその人たちが導いた人などを含めた人々全体を指すことばである。

[14]「経親」とは、経の長を指すことばである。所属が増えると経親として独立する。これを経立てという。

[15]2値変数間関連の測度とその中の0-0対に関しては、

Romesburg, H. C. *Cluster Analysis for Researchers*, 1984, Robert E. Krieger Publishing Co., Inc., pp.141-158. (西田英郎・佐藤嗣二訳『実例クラスター分析』1992年、内田老鶴圃、177-196頁。)を参照した。

ジャカードの類似性測度を用いたのは、0-0対が類似度に関わらないと判断したからである。

[16]多次元尺度構成法については、以下の文献を参考にした。

Kruskal, Joseph B. and Myron Wish, *Multidimensional Scaling*, Sage, 1978. (高根芳雄『多次元尺度法』1980年、朝倉書店)

斎藤堯幸『多次元尺度構成法』1980年、朝倉書店。

Schiffman, Susan S. M. L. Reynolds and F. W. Young, *Introduction to Multidimensional Scaling - Theory, Methods and Applications -*, 1981, Academic Press.